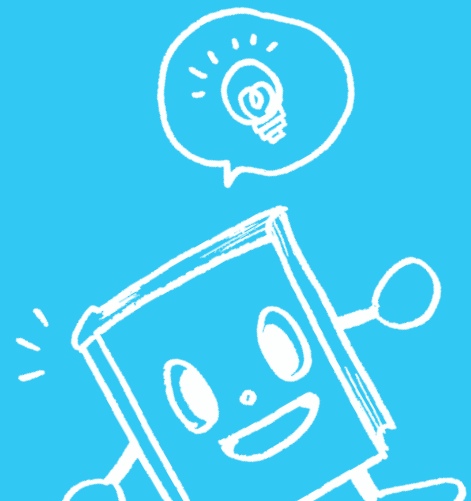


第1章

学校図書館とは



使っていますか？

学校図書館

学校図書館は学校の心臓部といわれます。また、「学校図書館がどれくらい使われているかで学校の質が分かる」という人もいます。あなたはどのように、どれくらい使っていますか？そして子どもたちにとって使いやすい学校図書館になっていますか……？

何のために学校図書館はあるのでしょうか？

「学校図書館法」によれば……

学校図書館は「学校教育に欠くことのできない基礎的な設備」（第1条）であり、

- ①「**学校の教育課程の展開に寄与する**」ことが目的
（つまり学校のあらゆる教育活動で「使われる」ことが大切！）
- ② **児童・生徒の「健全な教養を育成する**」ことも目的
※①②ともに「 」内は第2条より引用。

①と②は学校図書館のいわば使命！
なのです。

①は、**学ぶための学校図書館。**

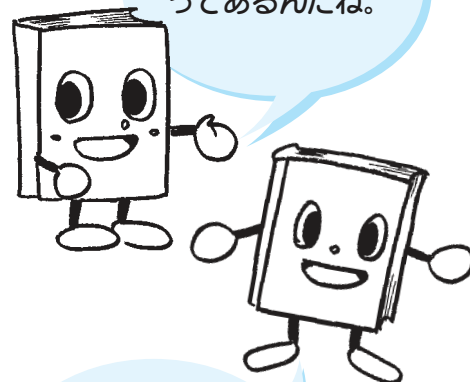
②は、**心を育てるための学校図書館。**

だから学校図書館は子どもたちの生きる力・学ぶ力を育てるために「欠くことのできない」ものであり、その資料はまさに「宝」なのです。

そのために、どここの学校でも学校図書館は設置されていますが、いくらきれいで整理された学校図書館があっても、使われなくては意味がありません。

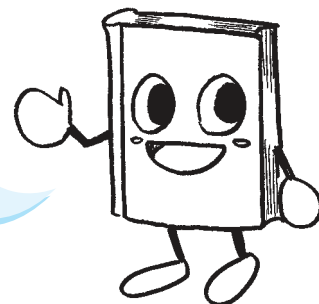
学校にいる私たちが使わなくてはせっかくの情報が生きないのです。

学校図書館に法律
ってあるんだね。



それだけ特別に重
要なものとしてつ
くられたのね。

使われなくては意味がない。
使われなくてはモッタイナイ。



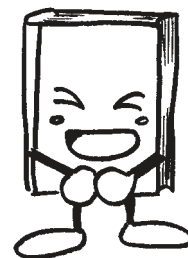
だからこの冊子は……

みんなが学校図書館を使おう！

というための冊子です。

「な～んだ！ 図書係のための冊子か。」
 「最近よく言われてる司書教諭のための冊子なのね。」
 ……と思ったらまちがいです。

しまい込まないでね！
捨てないでね！



なぜなら、学校図書館を使った教育を行うのは、

子どもたちの「育ち」に毎日かかわっている「あなた自身」だからです。

本を読んで自ら育つための読書力や、情報の活用能力・新たな情報をつくり出して社会に貢献できる力を子どもたちに身に付けさせることができたらすてきですね。

そういう力を身に付けた札幌の子どもたちを育てるためのガイドブックがこの冊子です。大いに活用してください。

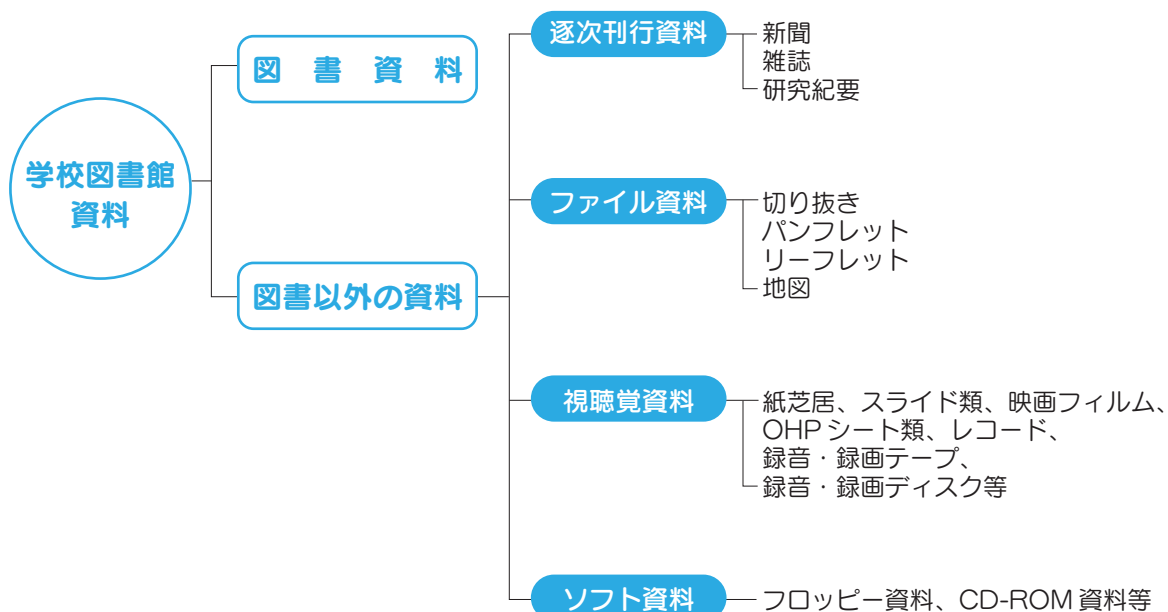
※札幌市の宝ともいえる「寄託図書」をあわせて使うと効果的です。

その① 「寄託図書」って？

簡単に言うと「図書の共同利用制度」です。市内38校の「寄託校（寄託図書館のある学校）」に18冊・40冊といった単位で同じ本が揃えてあり、調べ学習や集団読書などに好きな冊数分借りて授業等で使用できます。借り方はWeb予約かファックス予約。詳しくは65ページを見てください。

その② 「学校図書館の資料」って？

「学校図書館資料」というと図書だけではありません。下の図のように、実はこんなにいろいろ含まれています。



こうして見ると、まさに学校図書館は「読書センター」「学習情報センター」なのです。子どもたち一人一人に、学校図書館を豊かに使いこなす力を育てましょう。

教科、
総合的な学習の時間、
特別活動、道徳で、
「資料の活用」を！



「資料の活用」とは、「教科や領域の目的を達成するために資料を活用する」ことです。本指導資料には、「利用指導」「読書指導」の実践例を掲載しています。



詳しくは

6ページから！



「利用指導」あるいは
「情報・メディアを活用する
学び方の指導」とは？



子どもたちの「学校図書館を使える力」を指導することです。「情報や様々なメディアを活用することで、新たな情報をつくりだして発信し、互いに評価して高め合う力」を育てるためにどうしたらよいか掲載されています。



詳しくは

71ページを！



「読書指導」とは？



様々なメディアを通して得られる情報を、読みこなすための豊かな力や心を育てるための指導のことです。読書指導は、図書館を使いこなす力を身に付けるためには大変重要です。



詳しくは

72ページを！



「使える学校図書館」に
するには？



これらの指導が成り立つようにするためには、使える学校図書館にする必要があります。そのためには、管理・運営が重要なのです。



詳しくは

70・74
ページを！



みんながかかわることが
大切です！



すべてにかかわるのは、私たちみんなです。その中心となるのが、「司書教諭」です。



詳しくは

61ページから！



さあ、どこからでもよいのです。興味がわいたページからめくってみてください。そして一人でも多くの子どもたちに、一つでも多くの「すきとおったほんとうのたべもの」(宮澤賢治『注文の多い料理店』序文より)を！